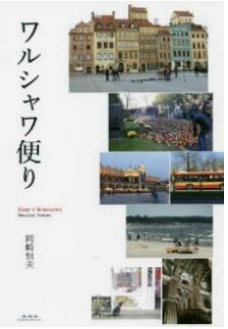
《新刊紹介》

『ワルシャワ便り』岡崎恒夫著

未知谷、2019.9

岡崎恒夫先生の若々しいお声の明快な語り口による「ワルシャワ便り」を毎月 NHK「ラジオ深夜便」でお聞きするのを楽しみにしておりました。ときおり放送を聞きそびれたり、月刊誌を買いもらしたりすることもありましたので、この度 2008～19 年までの 10 年にわたる貴重なお話を本の形で読めるようになりましたことをたいへん喜んでおります。

一般に未知の国の情報として知りたいのは、その国の地理・自然・風土・言語・文化・国民性・生活習慣・食事（特に固有の料理）・交通事情・教育・歴史・政治体制などだと思います。本書は、ポーランドに関するそれらの情報をすべて網羅していて、まさに「ポーランド事情百科」の観があります。初めてポーランドを訪れる人にとっては必読の書であるばかりでなく、ある程度ポーランドを知っている人にとっても有益な記事がいっぱい詰まった興味ぶかい読み物だと思います。



私事にわたって恐縮ですが、わたくしが最初にこの国を訪れ、一年暮らしたのは 1976～77 年のことで、ソ連型共産主義の暗い時代でした。肉や米などの食料やトイレットペーパーやティッシュペーパーなどの生活必需品が手に入りにくい日々でした。そのような時にいつも重要な情報を提供してくださったのが岡崎先生でした。ある日、町の中心地にある魚屋に「イカがはいりましたよ」とお電話をくださり、すぐさま市電に乗って「ツェントラルナ・ルィブナ」とかいう店にとんで行き、マレーシア沖で獲れたというイカの冷凍を買ったことを思い出します。

女性にとっては精神文化よりも食文化のほうが切実な問題なので、本書の「食生活」「ポーランドの料理」「秋の味覚」「ポーランド人と魚」「市民の台所=ハラ・ミロフスカ」「三大珍味」「食べるお祭りイースター」などの記事は、時代の激変を回想しながら特に興味ぶかく読みました。

政治体制が変わっても永遠に変わらないのは、ポーランドのカトリック精神だと思います。11 月 1 日の「万聖節」やクリスマスの記事は感激的です。

日本とポーランドとの文化交流の媒介となったワルシャワ大学日本学科の重要性は本書の各所に読み取れます。　（栗原朋友子、八王子市）

二風谷ツアーに参加して

三上 和子

会誌 98 号に同封されていました、平取町立二風谷アイヌ文化博物館第 25 回特別展「1903 年夏の平取～B・ピウスツキたちの短期調査より」のチラシを見て「行きたい!」と思いましたが、赤平から平取まで車で行く自信はありません。バスで行けそうですけれど日帰りは無理。温泉までバスもタクシーもないらしく、あきらめたところへ、ツアーのご案内のハガキが届きました。

まだ会員ではないのに参加させていただき本当にありがとうございました。この機会に（現地で）入会させていただきました。赤平に住んで、シカ、キツネ、蛇、エゾリス、小鳥達と共生しております。どうぞよろしくお願いします。

去年ショパンのピアノ曲のコンサートに参加して、ポーランド文化協会とブロニスワフ・ピウスツキを知りました。それから POLE を毎号送っていただき「文化の香り」がする会誌が届くのが楽しみでしたし、100 年前にこれほど優れて、弱い立場の人々をあたたかく見つめた人がいたことが驚きでした。

博物館に入りピウスツキのパネル写真を見た時には胸が熱くなりました。井上先生の講演と映画『Ainu｜ひと』を観たあと、映画にご出演の川奈野一信さんとお話ができて、松山敏さんに写真を撮っていただきました。以前からアイヌの人達には「ごめんなさい…」と思う私は「鮭を捕るくらい何だってさ!」と考えてしまいます。

平取は遠くて交通の便が良くありません。特別展を札幌で開催できたら良いのに…。

100 年前のピウスツキ達の平取までの往路、ポーランドまでの復路を、最近通販で買い求めた地球儀で見つめながら「人差し指の旅」をしています。

100 年後の今の、香港はじめ世界の各地の人々に思いを巡らせながら…。11 月 17 日にお世話になりました皆様、ありがとうございました。

（みかみ・かずこ、赤平市）

（上）筆者と川奈野一信さん
（下）ツアー参加のみなさん
（写真 新井藤子）